
その頃誰もがバカだった

ハスキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その頃誰もがバカだった

【Nコード】

N6419T

【作者名】

ハスキー

【あらすじ】

緊張することもなく、受験のストレスを感じることもない、中学生生活で一番バカをやれる中二。そんな中二の代表みたいな友人にツッコミ続ける日々を送る柳谷統夜。彼らに呆れつつも、楽しいと思う統夜もバカの一人。だってその頃は、誰もがバカだったのだから。

第1話・中二（前書き）

こんな中学生いないだろう、と思うかもしれませんが、暖かい目で読んでいただければ幸いです。そして笑っていただければなお嬉しい限りです。

第1話・中二

世の中には中(厨)二病という言葉がある。主に痛い方々に使われるらしい。よく知らないが要は中二が一番ぶっ飛んでてバカつてことだろう。まあその評価を俺は否定しない。少なくとも俺の周りではそれは限りなく事実だからだ。

「大艦巨砲主義！　大は小をかねる！　やっぱり巨乳が一番だろ！」

「柏原、君はやはり時代遅れだな。世はちっぱいブームだ。胸は無ければ無いほどいい」

「んなもんオタクだけだろ！　今も昔も変わらない魅力が巨乳にはあるんだよ！」

俺の目の前でアホな議論で火花を散らしているのは、残念ながら幼なじみである。

巨砲主義のいかにもスケベそうなのが柏原湧^{かしはらいたむ}。中二と言えばこんなというのを地でいくバカである。

で、まな板に豆主義なのが原田政明^{はらいだまことあき}。アニメに関する英才教育を受け、オタクを地でいくバカである。

そして俺が柳谷統夜。暴走する友人達にツッコミを入れる苦勞人。では柳谷氏。君はどう思う？」

「そうだ、さつきからだんまりはするいぞ！」

何がずるいか全然分からん。でもこんな議論に真面目に参戦する

気も毛頭ない。てか…。

「オープニングから何とんでもねえ議論繰り広げてんだお前らはっ！」

いきなり下ネタから入ったらもうネタ無いのかと思われるだろ！

「仕方ねえだろ。中二なんて下ネタくらいしか考えることねえんだから」

もっと他に考えることあるだろ。自分の中二観だけで語るんじゃ

ない。

「下ネタとは心外だな。僕が語っているのは現代における女体の神秘の追求…、いわば芸術なのだ！」

盗撮見つかつた時の言い訳にしか聞こえない。お前のフェチイズム何か芸術評価してもらえるか！

「下ネタにしる神秘の追求にしる、他に話すことねえのか？ 勉強のことか」

勉強というワードに柏原は明らかに難色を示した。こいつは滅茶苦茶勉強が嫌いなのだ。

「俺は分数で数学を諦め、そしてb e動詞で英語を諦めた男だぜ？

勉強で語ることなどない！」

分数は算数の範囲です。

「同感だな。そんなことに脳の容量を使うなら、一つでも多くのゲーム、アニメを網膜に焼き付ける！」

ダメだこいつら。進路先は確実にバラバラだろうな。別に俺が頭いいと言ってる訳ではないが、ここまで勉学を軽んじていない。

「まあ中三から頑張ればいいんだよ。高校が見んのはそっからの成績なんだからよ」

悪いが中三から勉強頑張る柏原を全く想像出来ない。

「よっぽど優秀な家庭教師とワンツーマンくらいしなきゃ無理そうだな」

「え、美人家庭教師とワンツーマン！？」

誰も美人なんて言っていない。

「やべえな、勉強どころじゃ無くなるぞおい！」

柏原の頭の中では既に美人家庭教師が来ることになってるらしい。「心配する必要はない。既にそのパターンは経験済みだ」

「マジか！？」

「ゲームで」

「やっぱりかよー！」

勉強が脳の容量の無駄とか言ってる奴に、家庭教師なんてもった

いなくて雇ってられんわな。

「貸してやるうか？」

「…お願ひします」

「借りるんかい！」

思わず声出してツッコんじやったよ！

「ち、違うからね。別にエロいの期待してるわけじゃないからね」
よしエロいの期待してるんだな。心配しなくても、お前はそういう奴だっと思ってるよ。

つかまだ中二なのにエロいゲームが手に入るわけが…。

「ネットシヨツピングで年齢偽って手に入れた。柏原氏の期待に応えられるだろう」

「応えちゃダメだろ！」

宅配の兄ちゃんも年齢確認しようぜ！ 酒とかタバコは厳しく年齢確認するくせに！

まあ宅配の兄ちゃんが酒タバコの確認してるわけじゃないけど。

「つか柏原の姉ちゃんって大学生だろ？ 家庭教師してもらえばいいじゃん」

第一話で実はもへったくれもないが、柏原には姉貴がいる。確かそこそこの大学に入ったはずだ。

「お、恐ろしいこと考えるんじゃねえ！ 姉貴に勉強教えてもらったら、条件に何を言い出すか分かったもんじゃない！」

俺や原田の前では普通の優しいお姉さんのだが、弟の前では違うらしい。

「だからこそ、ゲームで夢を見ればいいんだ。美人家庭教師とのシチュエーションは誰もが憧れる」
いや、憧れた覚えがない。

「実際に家庭教師頼んだって男が来るか中途半端な女が来るに決まってる！」

失礼なこと言うな！

「ならゲームの中でくらい、好みの美人家庭教師で教えを請いたい

じゃないか」

二次元至上主義のお前なら大満足だろうが、三次元至上主義の柏原は微妙だろう。

「そうだな…。姉貴に頼むくらいなら、せめてゲームで夢見るか」
あっさり陥落してる!？」

「落ち着けえっ！　そもそも家庭教師なんか例え話なんだから、他に勉強法を考えりゃいいんだ！」

「あれ、勉強する話だっけ?」「」
どうして二人共疑問符付けて返してくるかな!？」

「俺は家庭教師でも付けなきゃお前は勉強しないだろうって意味で言ったんだ。なのに美人家庭教師がどうのと勝手に妄想宣いやがって

…」
と、愚痴っているのに関わらず、柏原はポカンとしていた。

「…宣うってなに?」
俺は言葉を失った。ああ、中二だし普通分らないよな。

「辞書引け」
「持っていない」

だからお前はアホなのだっ!
「とにかくもう帰ろう。夕方六時代のアニメが始まってしまっ」

君の世界の中心はアニメか!
そっだ!…と即答しそうで怖い。

「ちっ、中学生にもなって六時に家に帰りやがって…。付き合い悪いぞ」

帰宅部の俺らにとっちゃ妥当だろ。つか放課後から二時間以上話してた計算になるから、充分付き合いはいい方だと言える。

つかそんなに中学生らしいことしたいなら…。
「じゃあ校舎の裏で煙草でもふかすか?」

「見つければ逃げ場もない。って尾○豊か!」
来年なら丁度良かったんだけどな。

「俺はそんな前時代的な中坊になりたかねえんだよ!」

いや、下ネタに走る当り充分前時代的な中坊だよ？

「では中坊のニュータイプたる僕は忙しい。失敬する」

そう言い残して原田は帰っていった。タバコにハマるよりアニメの方が健全かもしれないが…。

「何がニュータイプだ。仕方ねえ。エロ本落ちてないか探しながら帰るか」

落ちてるエロ本探すってタバコ以上に前時代過ぎるだろ。

とかく俺と柏原は帰路に着いた。

思考の極端な奴二人に挟まれ、気苦労の多い毎日を送っているが、案外嫌いじゃない。

それはやっぱり、俺自身もバカだからだろう。

第2話・両親

どうも統夜です。落ちてる工口本を発見出来ず意気消沈の柏原を元氣付け現在19時…。普段18時半には帰宅してる俺にとつちやちよつと遅い帰還だ。まあ俺の親に限って小言聞かされることは…。

「統夜！ 何時だと思ってるの！」

あった。珍しく母さんが玄関で仁王立ちしている。

何回か19時回った時があったがキツク言われたことなかったのに、今日に限ってどうしたもんか。

「ただいま。現在の時刻は19時3分だ」

「あらそう。ご飯もうすぐ炊けるわね」

怒ってたのにご飯の心配？ 十年以上この人と親子やってるが、未だに精神構造が分からん。

「とにかく荷物置きに行つていい？」

「どうぞどうぞ…って待ちなさい！」

小言言つてたこと思い出したのだろうか。

「一回遅くに帰ってきた息子を叱ってみたかったの。ありがとう。実の母親が親指立てて極上スマイルを見せてくれた。さて、19時は「遅い時刻」に含まれるのか。息子を叱ってみたかったってどんな神経してんだ。等々ツッコミどころがあるが、無視して部屋へ上がった。

かばんを部屋へ投げ出しリビングへ足を運ぶ。

全く、家に帰ってまでツッコミ役したかないっての。

「ただいま」。我が家の大黒柱のお帰りだぞ」

父さんが帰ってきたか。今日はやけに早いな。

「おう、我が息子よ。帰つてたか。だが中二になったことだし、道草してタバコふかすぐらいしろ」

「あんな百害あって一利もないもん、吸う奴の気がしれないね」

自分の息子に何喫煙推奨してんだ。似た者夫婦って言うか…、と

かく両親共にボケだから俺の休まる暇がない。

「百害あって一利無し…か。諺なんか使いやがって、品行方正にも程があるぞ！」

品行方正の何が問題だと言っのだろうか。確かに柏原と比べると真面目な方なんだろうけど。

「でもあなた、統夜ったら今日19時過ぎに帰ってきたのよ」

「なにいつ！」

母さんめ、余計なことを…。

「その調子だ。たまには親らしいことするために、どんどんやれ」

何故に両親共に息子の非行を喜ぶのかね。まあちよつと帰るの遅くなった程度だけど。

「ようし今日は統夜の門限突破祝いだ。母さん、大盤振る舞いにしてくれ」

「じゃあベーコン焼こうかしら」

シヨボっ！ おかず一品増えただけじゃん！ つかうちに門

限なんて無いだろ。あと門限突破祝いつてなんだ！？

「ベーコンか。塩コシヨウ振りまくったら酒の当てになるかね？」

未成年の俺に聞くな。

「知らないけど、塩分取りすぎで生活習慣病へ大きく前進しそう」

父さんは自分の腹部を見て台所へと消えた。

「鯖の塩焼きか…」

「ええ」

「塩分控え目でな」

「あら？ いつも塩辛くないと酒の当てにならねえって言ったな
かった？」

「…いや、最近味覚変わってな。薄味でも吞めるようになった」

「そう、分かったわ」

あ、戻ってきた。そして自分の腹部を見つめ、明らかに落胆し座

った。

「若い頃は無茶しても平気だったのになあ……」

どうやら中年には中年なりに悩みがあるらしい。話の流れからして、塩分過多を注意されたんだろう。

「つかどうして塩分ねえと酒が進まねえんだ？ 別にケーキとビールでも……いや、これは無いわ」

居酒屋でケーキを当てにビール飲んでるリーマン居たらシユール過ぎる。

「鯖焼けたから、配膳手伝って」

「よっしや行ってこい統夜！」

「へいへい」

俺は腰を上げて台所へと赴く。魚の焼けた良い匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

「ご飯もよそって持ってくよ」

「ありがとう。本当に私たちの子供か疑いたくなるくらい、出来た子ね」

「そこは自信持ってよ」

反面教師の賜物だから……とは言わぬが花ってね。

お盆に乗せテーブルへと運び配膳していく。家族三人分並んだところで、父さんが音頭を取る。

「んじゃいただきます」

「いただきます」

やっぱ魚と白米は合うな……。

父さんは大人しく鯖をつついていっている。だが震えているような……。

「ええい！ 生活習慣病がなんだ！ 俺は太く短く生きるんだ

あっ！

父さんはそう叫んで冷蔵庫へダツシュした。

そして手にしたのは缶ビールと塩コショウの瓶。もはやアルコール中毒じゃん。肝臓に癌が出来そうで心配だな。

「統夜、塩分取りすぎたらどうなるの？」

「血圧上がる」

「うっ！」

父さんの塩コシヨウを持った手が止まる。

「まあ、血圧上がったらどうなるのかしら」

「動脈硬化して、そうなった場所によって色んな病気が起こるね」

「うっ！」

ああ、悩みが無限ループに入ってるみたいだな。

「さらにお酒何か飲んだら大変じゃない？」

「動脈硬化に関係してるか知らないけど……」

あ、塩コシヨウ置いて缶ビールに手を伸ばしやがった。

「発癌率は跳ね上がるね。父さんタバコも吸うし」

「チクシヨオオオオっ！！！！」

父さんは雄叫びを上げ缶ビールを握り潰した。

って何やってんだこの人！？

「母さんタオルタオル！」

母さんは直ぐにタオルを用意し、こぼれたビールを拭き取りにかかった。

カッターシャツのまま父さんは食事をしていたので、右裾はびしょびしょ。脱衣場に直行した。

「ちよつと追い詰め過ぎたかしらねえ……」

母さんは申し訳なさそうに脱衣場を見る。

父さんは日本人にしては酒強い方だ。その代わり内臓脂肪付きやすい傾向にある。まあ結果オーライかな。

ビールを拭く母さんを手伝いながらそう思った。

第3話・姉貴

よう、柏原湧だ。残念ながら工口本は見つけられなかったがまあいい。家にある奴で我慢するか。とある事情で家には俺しかいないはずだしな。

「ただいま〜つと」

ま、誰かいるわけないけどな。父さんは国際ジャーナリストで海外飛び回ってて、母さんは父さんについていつている。

つまり俺と姉貴の二人暮らしってわけだけど、その姉貴も今はバイト。俺の天下だぜ。

「お帰り、遅かったわね」

俺の天下一瞬にして崩落。つか何で、どうして、why!?

「どうして姉貴がここに!？」

「ん〜? 何かバイト無くなっちゃってさ。店長がミスってシフト入れ過ぎちゃったみたい」

みたい…じゃねえよ!

これじゃおちおちお宝本観賞も出来ないじゃないかよ…。

「全く、世界でただ一人血を分けた姉弟だったのに、そんなに絶望することないでしょうよ?」

ちっ、まあ姉貴がバイト入る日なんていくらでもあるだろ。お宝観賞会は次に取っとくぜ。

「ああ、そうそう」

「ん?」

「あなたのお宝本、すぐ見つかりそうだから場所変えてあげたから」

……………?

えっとお宝本の隠し場所が見つかって、姉貴は親切に場所変えてくれたのか。

「そっか、ありがとな」
「なんのなんの」

って…。

「アホかあああっ！！！」

何処の世界に弟のお宝本の隠し場所変える姉貴がいるんだよ！
とにかく確認せねば！

俺は階段を駆け上がり、二階の自分の部屋に飛び込んだ。
そして隠し場所を確認する。

「そんな…。マジで無いじゃん…」

俺は膝を落とし落胆した。雨の日、薄暗い中輝いて見えた一冊の本。まさに“お宝”と呼ぶに相応しい 光を放っていた。そんなお宝本を集めウンケ月。まさかもうお別れの時が来ようとは。

…いや、まだだ。

まだお別れには早すぎる。諦めたらそこで観賞会終了。先生…。
俺、まだ観賞したいです！

「ああああねええきいいいっ！！！」

俺は一気に階段を下り、姉貴に詰め寄った。

「俺のお宝本はどこだあああっ！！！」

「お宝は自分の力で掴み取ってこそでしょっ！！ 自分で何とかしなさい！！」

そうか！ 確かに自分で見つけ出したお宝本だからこそ愛着が生まれたと言っても過言じゃねえ。

よっしゃ絶対見つけ出してやるぜ！

「そんなことよりご飯にしない？」

俺は姉貴の気の抜けるような台詞に躓き、そしてテーブルの脚に足の小指をぶつけた。

「ぎゃあああっ！！！！！」

急所の次に痛い身体の部位だよここ！

「一人で何悶えてるの？ 妄想でも大丈夫な口？」

「ぐうう…。お、弟を勝手にそんなマニアックな道を走らせてんじやねえ…」

しかもそんなゴミ見るような目で。

「いやあ、お宝本無い頃は妄想でも大丈夫だったんじゃないかと」
んなわけあるかあつ！

少なくとも俺は視覚が満たされねえとダメなんだよ！

「まあ腹が減っては戦は出来ぬ。お宝本探しはそれからいいですよ。パパッと Pasta 作っちゃうから待つてて」

そう言つと姉貴は台所に行った。勝手にお宝本の場所変えて、勝手に飯にしようとしやがる。本当に勘弁してほしいぜ…。

けど飯作る間に探すことは出来る。さっそく搜索といくか。

取り敢えず自分の部屋だな。俺はまた二階に上がった。

自分の部屋を冷静に見渡すと散らかっているのがよく分かる。場所を知ってる俺はともかく、何故姉貴はこんなごみ溜めからお宝本だけを見つけ出せたんだ…？

姉貴の奴、最初つからお宝本狙つてやがったな。

何にせよ、部屋片付けないことには搜索どころじゃねえな。掃除するか。案外その最中に見つかるかもしれないし。部屋が綺麗になつてお宝本見つかりや、まさしく一石二鳥だぜ。

こうして俺は掃除を始めることにした。

脱ぎ散らかした服はまとめて洗濯機だな。いつ着たかも分からねえのばつかだし。

いらねえプリントも全部捨てちまえ。中一の頃のテスト？ もちろんいらねえプリントの一つだ。まあ奇跡的に五十点超えた理科のテストと保健体育のテストは残しておくか。もう二度と五十点なんて超えねえだろうしな。

あ！ 昔のジャ ブじゃねえか。三ヶ月に一回のペースで大体

廃品回収行きだが、残ってた奴があつたのか。
へえ〜…。

「ご飯出来たよ〜」

「あいよ〜。って…」

しまったあつ！ 思わずジャ プ読み耽つちまった！ 俺の

一石二鳥の計画が…。

まあいい。ひとまず飯食って今後の掃除&お宝本搜索に備えるか。

下に降りると待つていたのはミートスパゲティだった。シンプル
なだけに食べ安いから、早く食い終わる。

「んじゃいただきます！」

フォークでパスタを巻き、口へ運んでいく。

「あ、間違えて唐辛子の粉末入れちゃったけど大丈夫だよな？」

もちろん俺の手は止まった。舌の痛覚が刺激され、汗が流れる。

「ぎゃあああつ！！！」

大丈夫なわけあるかつ！

水を一気に飲み干し姉貴を睨む。

「何しやがんだ！」

「ドジっ娘萌え？」

もう二十歳のくせに何がドジっ“娘”だ！ なんて言ったらど
うなるか分かったもんじゃないから、思うだけで止めておく。

「んなもん現実にやられても迷惑なだけだろうが」

「そっかあ。萌えなかったか」

んなとこ問題にしてねえよ！ つか何残念そうにしてんだよ！
姉貴に萌える弟が現実にいるわけねえだろ！

「まあ頑張つて食べてね。私も頑張るから」

フォークでパスタを巻き、姉貴は口へと運んだ。

「かっつっらつ！！！！ なにこれ、何スコビルあるの？」

「知るか！」

ちなみにスコビルつてのは辛さの単位のことな。

火を吹きながらも何とかスパゲティを完食し、俺はお宝本搜索に戻った。

…が、全く見つからねえ。まさか俺の部屋じゃねえのか！？

「ようやく気付いたみたいね」

「姉貴…」

「そう、実は私の部屋にあるのよ！」

それを聞いた瞬間、俺は枕を姉貴に投げつけた。顔面にまともにくらい、固まっている姉貴を尻目に、俺は姉貴の部屋に突入した。

俺のお宝本は机に置かれていた。

「こつちの方がマズイだろうがあああつ！！！」

第4話・委員長

ある日の午後からの授業。担任である尾崎先生がダルそうに入ってきた。

「はい席つけお前ら。今日のHRは来週の山登りの班決めだ。方法は委員長に任せる」

そう言う先生は一番後ろの空席に腰を下ろした。やる気の無さは天下一品だな。

そんな先生に代わって教壇に立ったのは伊藤綾いとうあや。才色兼備の優等生で我が二年一組の委員長だ。

「これから先生が仰っていたように、班決めをします。適当に五人集まってもらえば結構です。が、手元の資料には何故か男女混合と書いてます。早めの少子化対策でしょうか？」

いくら何でもそれは深読みし過ぎだろ。

「という訳で少し時間を取りますので、各自班を作ってください」

委員長の言葉で皆は班を作り始める。

俺の周りは一言も声をかけていないバカ二人しか来なかった。

「ち、何かモテねえヤツとモテるヤツ分けられたみたいでムナクソ悪いぜ」

柏原はこう呟くが、実際はこいつの普段からの下ネタ発言に、ほとんどの女子が引いてる結果である。あと原田のマニアックさにも俺にしてみればとばっちりだ。

「予想通りこの三人が溢れてるみたいですね」

「みたいね」

そう言うてこちらにやってきた変わり者は委員長と、その友達奥おく井紗香いさやかだ。

「一緒の班になってくれるのか!？」

柏原はさっそく二人の女子に飛びつく。さっきまで不機嫌は何処へやら…。

「委員長としては仲間外れを作るわけにはいきませんから」

「私はその付き添い」

よく見れば俺達以外は上手いこと班が決められている。

なるほど、委員長は溢れる俺達の救済策か。理解すると滅茶苦茶惨めな気分になるな。

「よく分からねえけど、よろしく頼むぜ」

こういう時柏原のバカさが羨ましい。ただ女子と同じ班になれるってだけで、舞い上げられるのだから。

こうして山登りの班は俺、柏原、原田、委員長、奥井となった。

柏原と原田のバカ話に二人が呆れないことを祈ろう。

HRが終わり、休み時間となる。意気揚々と隣に柏原が腰掛けてきた。

「いやあ、俄然楽しみになってきたなあ、山登り」

何がそんなに楽しいものか。年寄りの行楽じゃあるまいし、テンション上がらないっての。

俺と同じく意気消沈気味の原田もこちらにやってきた。

「全く理解に苦しむね、柏原氏。大艦巨砲主義の君が、ツルペタ三次元女子と群れることを楽しむなんて」

あれ、気掛かりなのはそっちですか？

「そりゃ巨乳の方がいいけどよ。さすがに中学生で巨乳はバランス悪いだろ。やっぱJCにはJCの良いところがあるってこった」

こっちはこっちで変な講釈垂れだした！

巨乳でも中学生でもいいって、もはや何でもアリだろ！

「そうですか。巨乳のJCはバランス悪いですか。嫌われましたね、紗香」

「いや、私別に巨乳じゃないけど」

意外にも柏原と原田のバカ話に首を突っ込んできたのは、委員長と奥井だった。

「うゝむ…」

さっきの委員長と言葉が気になったのか、柏原の視線は奥井のあ
る一点に集中していた。

「ってどこみてんの!」

奥井の水平チョップが柏原の首に入った!?

まあ柏原に凝視ケタモリされたら水平チョップの一つや二つ入れたくなる
わな。

「どうでした、柏原君?」

「服の上からじゃやっぱ分からねえわ…」

息も絶え絶えながらも、委員長の質問に律儀に応える柏原。

「じゃあプール開きをご期待下さいってところですね」

「だな…」

あの委員長が柏原と同レベルの会話をしているだと…。

「どうかしましたか?」

委員長は真っ直ぐな目で俺を見据える。

「いや、委員長がそんなこと言うなんて思ってたから」

たじろぎながらもそう言うと、委員長は小さく笑った。

「保健体育の成績も良いんですよ」

「さっきの会話、全く保健体育の知識入ってなかったでしょ」

ツッコミ取られた!?

なるほど、すっかりものの優等生かと思いきや、委員長ボケだな。

そして奥井がツッコミか。社会的役職とお笑いポジションが一致

してねえ!

「ごめんね、柳谷君。幻滅させちゃった?」

「幻滅するほど仲が良かったわけじゃない。驚いたのは事実だけど」

伊藤は率先して委員長に立候補したし、奥井も彼女の仕事をよく

手伝っている。まだ同じクラスになって一ヶ月しか経ってないが、

少し先入観を持って彼女らを見ていたのは事実だ。

「せっかく同じ班なのでから、親睦を深めようと思ひまして」

そんな切り口では柏原と以外親睦を深められないぞ。

「…まあ少しはどういう奴かは知れたかな」

肩をすくめて俺はそう言った。委員長には奥井っていうツッコミ
がいるわけだし、俺の負担が増えることはないだろう。

「胸の話で盛り上がっていましたから、イケると思ったんですが」
いつかの会話（第一話）聞かれてた!？」

あの時の暴拳がこんなところに皺寄せが来るとは…。柏原と原田
ぶん殴りたくなるな。

委員長と奥井とのマトモなコンタクトを逃したと思うと、やるせ
ないな…。

「でも普段から下ネタ多いよね」

「いえ、保健体育の復習です」

普段からかよ！ どのみちこうなることは避けられない訳ね。

「委員長…。俺、あんたとは仲良く出来そうだ」

「そうですね。貴方とは同じ匂いを感じます」

クラスと頂点と底辺ががちり握手を交わした。

ある意味奇跡的なシーンに感動すら覚えてしまう。

俺は頭を抱えた。

「知らなかったとはいえ、よく委員長をやっていられるもんだ」

「綾って公私混同しないから。その代わり、反動のせいかな普段はえ
げつないけどね」

つまり今は“私”ってか。まだ学校何だから“公”でいてほしい
ね。

あれ、でも少子化対策がどうこう言ってたような…。

よし、中学生だし、よく分からないってことにしよう。

「バ、バカな…」

おお、原田ですら同様してる。

「この僕が空気だと!？」

知らねえよ！

だったら会話に入ってこい！

「大丈夫、綾はアニメとかにも精通してるわ」

「そうか。なら出番はあるな」

既にこの会話が大丈夫じゃない。出番とか言うんじゃない。

「では私たちはこれで。楽しい山登りと致しましょう」

委員長は時計を一瞥するとそう告げた。もう直ぐ六時間目が始まる時間だ。

「じゃあね」

「おう！」

奥井が手を振り、柏原が応える。別に下校ってわけじゃないんだが。

二人は席に戻ると次の授業の準備を始めた。

切り替えの速さには驚かせられるな。

「何だか楽しくなりそうじゃねえか。プール開き」

「お前は結局胸にしか興味ないのか！」

とツッコミと同時にチャイムが鳴った。

委員長と奥井のためにも、柏原だけは外した方がいいかもしれない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419t/>

その頃誰もがバカだった

2011年6月19日23時10分発行